

思い出を辿る

寺田 勝美 (S27 年卒)

私は、昭和二十七年に卒業して以来五十九年が経ちました。昭和二十一年に静岡商業に入学する契機となったことについて二つの大きな変化があったことと

一つは、太平洋戦争下での度重なる空襲の中で、静岡大空襲という多くの犠牲者を出した悲惨な現場と市街地が焦土と化したことを目の当たりにし、何とか命拾いをしたんだという漠然とした空虚さを感じた凄惨な戦災を体験したこと。他の一つは、昭和二十年八月十五日の戦争終結のラジオ放送を焼け跡で聴き、「やっと戦争は終わったんだ」と体から力が抜け放心状態になった経験をしたこと。

「戦争」と「平和」の二極の人生経験は捨てがたいものがあります。家庭の経済面と即戦力化のための商業実践の習得を目指すことで、教育制度改変最後の併設中学への入学ができました。入学当初は、戦災の影響で教室不足から、武道場、体育館、講堂を間仕切りして授業を受けました。高校へはそのまま進級しましたが、その際、2クラスほど増員されましたが、当

時としては静岡としての校訓の「剛健進取」は維持して、画期的な男女共学に踏み切りました。



剛健進取

あの時の学生生活

望月 健三郎 (S27 年卒)



昭和二十年六月の静岡空襲を経て廃墟の中、八月に終戦を迎えた我ら当時国民学校六年生たちは、これから迎える戦後の新しい時代は商業流通時代ではないかと考えたうちの一人であった。特に受験勉強もできず入学試験に臨んだ。試験も科目別でなく、筆記試験は一枚の問題用紙に国語、数学、理科などの混じった問

題で、ほかに口頭試問と簡単な体操でした。私は火傷で右膝が曲がらず上半身だけのテストでした。

入学してからの半年間は、体操の時間はいつも見学組でした。入学時、校舎はなく講堂、武道場、体育館が焼け残り、これを学年で半分ずつに分け、全学年一度に授業ができず、一年・三年・五年生は午前中に、二年・四年生は午後と一週間ごとの交代で行われた。

通学時の服装は、今のような黒の学生服を着た者は皆無で、国民学校の時の国民服(国防服)で、帽子は軍隊で使っていた雨避けの生地、厚い包布で作った戦闘帽に白線を縫いつけ徽章は黒地に橙色の刺繍で「静岡」と「SC マーク」になるまでつけ、履物はもちろん革靴は無く、ほとんどの人は下駄ばきで、中には女性の赤い鼻緒をしたものもいくつか見受けられた。



靴も軍隊で使っていたズック製のものに海老茶の靴クリームで塗ったものを抱えて通った。運動場の競技トラックは、防空壕を埋めた跡が雨であちこち穴が見え、片隅には教師たちが野菜や芋づくりのために使われた。昼食の弁当箱には米飯ではな

く、いつもさつま芋の蒸かしたものでしばらく続いた。

やがて、講堂の横に新校舎ができたが、窓にはガラスではなく、蝇帳のような網戸にセルロイドを流した代用ガラスで、鉛筆やガラスペンで突くと、すぐに穴が開くようなもので、よくいたずらもした。

教科の中では、歴史や地理はなく、体育では柔道、剣道はなく、したがって柔道部、剣道部、弓道部も卒業するまで復活はありませんでした。

当時の GHQ の指令に

よるレッドパージにて、教師の永年勤続者の追放に会い、数名が該当する中で、特に辻田健治先生には

「安倍川原に骨埋めんと期せしかどマッカーサーの指令に飛ばさる」

二十五年間で十人の校長に任せ、送り出した教え子は五千人を数えたそうです。さぞかし無念であったでしょう。昭和四十六年二月十一日の教え子有志による先生の喜寿の賀宴の謝辞に代えた短歌三十首のうち

「ひたぶるに大和魂説きしかはマッカーサーの追放寸前」

あるように、その思いが何え、非常に印象の深い教師の一人であった。教育制度改革により、母校も商業高等学校になり、五十三期生は静岡高併設中学校を終え、静岡商業高等学校になると同時に、初めての男女共学として、二クラスの募集をし十二人の女子を迎えました。このような変遷のなかで、貴重な経験をした青春の一ページであった。

落下音

服部 善男 (S30 年卒)

2001 年 9 月 11 日、同時多発テロから十年。ほとんど関心のない方には、過去のことです。義息が命を落として 5 回の訪米から、あれこれを記します。FBI の招きで現地を訪れる。州兵護衛の下、中央埠頭から現場岸辺まで船で進む。匂い、硝煙、瓦礫音響。対して静かにじっと見つめる遺族。そっと赤十字の係が私にもティッシュを渡してくれる。中央埠頭に集う様々な奉仕者。90 歳の足の不自由な老人が、ゴミ拾いや机を拭いて廻る。奉仕に対し報奨がついてくると聞く。彼の教会で葬儀の集いがあった。平服姿の知人、友人、少年野球の人々。百人ほどの心温まる式について、地下室で立食会がある。「ユーはミュージシャンか?」とも聞かれる。私のみ場違いな喪服だった。教会でのアヴェマリアはすばらしい響きだった。名も無い人からの数ドルの寄付、教会婦人差し入れの料理など、感謝とともに受ける。現場 2F の遊歩道で若い婦警が、命からがら下りて来た人々に、ライトでジスウエイと誘導した彼女も、落下物の中に埋もれた。家族は名の公表を控えた。現場で「ドサッ」と鳴る物音。熱さに耐え切れず手離す。それは即死を意味した。「ドサッ」この音だけは永久に消し去れぬ。真っ暗闇から、一条の光で命を得る。恐怖に苛まれる彼女は使命に従って命を落とす。数多くの犠牲者と共に警官、消防士も同じ運命を辿る。彼は数ヵ月後に左腕骨片 20 センチが DNA で発掘された。攻撃側の地に記念館を建てる遺族。民主国家の商人が彼らに武器を売る。識者は論ずるも現実の厳しい国際情勢には手も出せぬ。政治力で「ドサッ」を消し止める力こそが、近未来の平和への道程と考える。紙数が尽き、語りきれぬ。再機会まで。

